→マーケットの読み方

「トーニングシューズ」は、なぜ女心をつかんだか

351万足

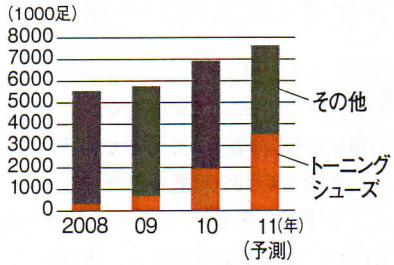
履いて歩くだけで足腰のエクササイズ効果を生み出すというトーニングシューズが人気を呼んでいる。柔らかいソールがバランスボールの上にいるような不安定さをつくり出し、歩くたびにふくらはぎや太ももに自然な負荷がかかる。普通の歩行よりも筋肉を使うことでシェイプアップにつながるというわけだ。

2009年から商品を投入しているリーボックジャパンで女性向けカテゴリーの責任者を務める今井清臣氏は「私たちは『履くだけジム』という提案をしてきた。仕事や主婦業、子育てと多忙な女性が通勤や買い物など日常生活をしながら、フィットネスもできる手軽さが支持されたと思う」と好調さの理由を説明する。

実際、矢野経済研究所のマーケット調査でもトーニングシューズの国内出荷数量が、09年の67万足から10年には193万足と爆発的に増えた。今年も伸び率こそ鈍化しているが、数量は約2倍の351万足と予想される。スニーカーなどの苦戦を横目に、ウオーキングシューズ全体がわずかながらも伸長しているのは、トーニングシューズが底上げしているからにほかならない。

しかもまだ、立ち上がったばかりのマーケットだけに、認知度は5割そこそこ。今井氏は「当社では、35±10歳の層に販売の重点を置いた。これまで購入の主力になったのは、25歳から35歳の新商品に敏感な女性たち。最近では40〜50代にも広がっている」と話す。今後、デザイン、カラー等の充実によって消費者への訴求力が増せば、まだまだ伸びしろはある。 P

ウオーキングシューズ国内出荷数量推移



出所:矢野経済研究所
数量は、メーカー出荷数量ベース

岡村繁雄=文　ライヴ・アート=図版作成

→ビジスパeye

記録的な円高が日本にもたらすチャンスとは?

記録的な円高が続いている。有料メールマガジン「ビジスパ」でも、この話題が多く取り上げられた。

竹中平蔵氏は、堀江貴文氏のメールマガジンへの寄稿の中で、「欧米経済への不安から円が買われている」という巷間に広まる円高要因の認識に疑問を投げかけ、日本にマクロ的な視点が欠けていると警鐘を鳴らす。戦略コンサルタントの田村誠一氏は、ソニーや東芝を例に、電機業界を中心に対ドルにおける利益変動の影響を抑え、円高対応力が強化されつつあることに言及している。

この円高に、好機はないのか。田村氏は、日本企業にとってクロスボーダーM&Aの千載一遇のチャンスであると指摘する。セゾン投信社長の中野晴啓氏も、円高下で海外の企業買収が増えるだろうとし、グローバルな成長を遂げられるかがカギだと語る。

私たちの身近な面ではどうか。「個人も含めて海外のあらゆるものを安く買うことができる」(中野氏)ため、海外旅行などは円高差益の恩恵を受けることができる最たる機会だろう。

投資の観点も見逃せない。経済評論家・ファイナンシャルプランナーの伊藤亮太氏は、「今注目したいポイントとして、やはり『為替』は外せない」とし、「このボックス圏相場(一定の価格帯で上下する相場状況)はうまく活用すれば十分利益は確保できる」とFXの効率性を解説している。

今後の為替推移は見守るほかないが、伊藤氏は過去の為替介入の事例を挙げ、ある程度のインパクトを与えるにとどまっていることも指摘している。 P

今月の名言

根本的な問題(米国の債務問題、ヨーロッパの財政問題)が解決されずに介入が行われる場合には、トレンドを反転させることは難しい

「時代を勝ち抜くマネー学
—これからの生活に活かす—」
経済評論家・ファイナンシャルプランナー
伊藤亮太

グローバルで見たときに、日本の会社は一つ一つが小さすぎる。より成長して、需要が拡大していくマーケットを確保できるかが重要

「ビジネスマンのお金力アップ講座」
セゾン投信社長
中野晴啓

メールマガジンサービス
「ビジスパ」の購読はこちら
http://biz-spice.jp/

中澤 始=文